

沖繩の仏教

神戸女子大学教授の知名定寛さん

が、沖繩文化協会の主催する沖繩文化協会賞の「比嘉春潮賞」に選ばれた。五十五歳の本人からは「もう若くはないけれど、後輩の刺激になればと思ってお受けしました」という、少し照れたような手紙もいた。十一月末には東京・早稲田で表彰式があり、記念の講演「仏教史の視点からみる古琉球王国の形成」を聞きにかけた。

沖繩の仏教伝来は鎌倉時代らしいが、史料も乏しく、はつきりしない。今回の発表では、琉球初の統一王朝をつくった尚巴志王の一四三八

南無

善財

すがわらのぶお
菅原伸郎

東京医療保健大学教授

年の文書に《十刹内の報恩寺の僧官》といった言葉が見えており、当時、すでに十カ寺はあったことが分かった。王朝が育っていく過程では、宗教的権威であり知識人でもあった僧侶がさまざまな形で権力者に協力していた、という。

支配者たちはなぜ仏教を受け容れたのだろう。知名さんは『沖繩宗教史の研究』（溶樹社、一九九四年）でこう書いていた。《彼らが仏教を如何に理解したのかは明らかだ。より

高度な霊力と呪術力を発揮する神的なものとして、自己の権力強化や戦勝を保証する守護神的存在として受容したのである》

沖繩本島浦添地区で発掘された十五世紀前半の石製厨子には、正面に阿弥陀仏も彫られていた。浄土教の受容はこれまで、明国へ向かう浄土宗の袋中上人が一六〇三年に漂着し、三年ほど念仏を広めたことに始まる、とされてきた。しかし、阿弥陀信仰はその前に伝わっていたことになる。

知名さんの発表を聞きながら、あらためて「その仏教がなぜ定着しなかったのか」と考えてしまった。那覇市の郊外、首里城周辺にはいまま臨済宗や天台宗の古い寺が並んでい

る。しかし、なかには「ユタ寺」と呼ばれる寺院もあって、地域の信仰に取り込まれている感じが強い。農村部にはほとんど伝わっていないことから、仏法が琉球人の心をつかんだとはとてもいえない。

葬祭業者に頼んだら、本葬と四十九日と一周忌で別の宗派の僧侶がやってきた、といった話も聞く。江戸幕府の寺請制度があった本土では家々に旦那寺が決められていたが、直接支配の及ばなかった琉球では「先祖代々の宗旨」がないのだ。しかも、浄土真宗を禁制にした薩摩藩の監視を受けていたため、明治初期までは親鸞の教えが厳禁だった。

その一方で、近年まで各地の葬儀に「ニンブチャー」と呼ばれる遊行芸

人がやってきた。もともとは「念仏者」のことで、鉦かねを叩いて念仏らしきものを唱えていく。葬儀そのものはユタなどが取り仕切っており、その引き立て役を演じて金銭をもらうのだ。近ごろ人気の「エイサー」も「似せ念仏」が始まりだったらしい。つまり浄土宗の本来はすっかり忘れられて、まったく形骸化してしまった。

沖縄県具志川市出身の知名さんは京都の龍谷大学に進学し、二葉憲香、池田源太、千葉乗隆といった先

生に教えを受けた。迷信を厳しく批判する親鸞の流れを継いでいるだけに、その研究は、民族信仰のなかで仏教がいかに苦戦し、かつ取り込まれていったか、という視点で貫かれている。その嘆きや怒りがあるからこそ、地味な仕事も輝いているのでは、と思った。

沖縄仏教の歴史は、実は本土の伝統仏教にとっても他人事ではない。なるほど葬儀では読経がさまざまに行われて念仏も唱題も聞こえてくるが、仏法はどこまで理解されているだろう。教団や僧侶はそのための努力をどれだけしているだろう。まさにいま、あの「ニンブチャー」に至る形骸化が各地で進んでいるようにも思えるのだ。

